

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

【図書紹介】『カント『純粹理性批判』を読むために』ヨハン・シュルツ著 菅沢龍文・渋谷繁明・山下和也訳 梓出版社 二〇〇八年

著者	小野原 雅夫
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	5
ページ	62-62
発行年	2009-06
URL	http://hdl.handle.net/10114/7462

【図書紹介】

『カント『純粋理性批判』を読むために』

ヨハン・シュルツ著 菅沢龍文・渋谷繁明・山下和也訳 梓出版社 二〇〇八年

小野原 雅夫

カントの『純粋理性批判』第一版が出版されたのが一七八一年、その翌年にガルヴェとフェーダーによる書評が出たが、それらは『純粋理性批判』に対する誤解に基づくものであった。カントはこれに対抗するために八三年に『プロレゴメナ』を出し、さらには八七年に『純粋理性批判』の改訂第二版を刊行することになる。本書は、まさにそうしたさなか一七八四年（すなわち『プロレゴメナ』刊行後、第二版刊行前）に出版された『純粋理性批判』の解説書である。『純粋理性批判』が誰からも理解されないことに苦悩していたカントが、少なくとも一人は理解してくれる人がいたと激賞した、カントお墨付きの解説書である。

本書は二章から成る。第一章「内容を明瞭に提示する試み」、第二章「より詳しい吟味のために、いくつかの示唆をする試み」である。第一章では、『純粋理性批判』の全体がみごとに要約されていく。シュルツが自分のことばで言い換えたり説明したりしているわけではなく、カントのことばに忠実に要約しているだけなのだが、驚くほどわかりやすい。特に感性論から

原則論にかけての部分は、超越論的観念論の神髄をコンパクトに挟り出しているように思われる。また第二章の冒頭では、『純粋理性批判』の主要課題を五つにまとめて提示している。紙数の関係上それらを引用することはできないが、簡略化して記せば、①感性の真の本性の規定、②全認識の根底にある悟性の根源的概念の発見とその本性の規定、③純粹直観ならびに純粹悟性概念の客観的実在性の証明、④理性の限界の規定、⑤仮象の源泉の解明、の五つである。カントがこれらの課題をいかに解決しようとしたかを説明する形で、もう一度『純粋理性批判』の全体像が浮き彫りにされていく。

他人の思想を私見や解釈を交えずにまとめていくというのは、意外とできそうではないことである。カントと同時代に生きて、他の解説書の助けもない中で『純粋理性批判』を正確に読み取り、己を殺してその紹介に徹したシュルツの努力は驚くべきものがある。そして、『純粋理性批判』を数頁読んで音を上げてしまう学生たちのためにわかりやすい解説書を提供しようとして、二〇〇年以上前に書かれた本書に目付けた訳者の慧眼にも敬意を表したい。

原著 Johann Schulz, *Erläuterungen über das Herrn Professor Kants Critik der reinen Vernunft*, Kongsberg, 1784.